

火野葦平『革命前後』

坂口 博

火野葦平の長篇小説『革命前後』(中央公論社、60・1)に、敗戦直後、一九四五年八月末の広島駅が描かれている。

広島駅は異様な混雑をしていた。列車に乗る客だけではなく、停車場を宿している連中が多いらしく、一隅には釜やら鍋が置いてあつて炊事がはじまっていた。プラット・フォームの片隅にゴザを敷いて寝ている者もある。みんな哀れな風体の人たちばかりで、中には綿帯を巻いた怪我人、胡瓜のよう青い顔をした病人も少くなかつた。その中に、復員の兵隊がたくさんまじついていた。なんとも形容のしようのない臭気がたちこめている。それは腐臭のようでもあり、屍臭のようでもあつた。

若松から来たときには、広島駅に夜明け前に着き、すぐ芸備線に乗り換えたので、様子があまりよくわからなかつた。しかし、昼間見ると、まつたくむぎんという他はなかつた。コンクリート建てであった駅の建物は木ツ端みじんに粉碎され、鉄骨が飴のようにひんまげられて露出していた。間に合せにバラック小屋が建てられているが、街の方を見ると、一面に瓦礫の原っぱであつた。ところどころに、ボツンと煙

突が立ち、焼けのこつたドームの残骸が見受けられた。

広島県の芸備線庄原駅から、バスで約一時間降りたところからまた二里ほどの、山奥の母の実家へ疎開していた妻子を訪ねて、一週間を過ごし、福岡へ戻るときには通過したのだった。

鶴島正男の「新編『火野葦平年譜』(鉛説 13号、96・8)によれば、八月二一日に「妻子の疎開先、母マンの実家を訪ねる」。二六日までは確実に滞在し、月末には若松の自宅へ戻つているようだ。実際の体験に、大胆な虚構を加えることで、「戦記」をふくめた小説を構想した作者なので、すべてを実見した光景とは断定できないが、広島駅に関しては、作者の見聞に基づくだろう。

このあと、広島と長崎原爆についての「回顧」(といつても、作中ではひと月も経過していない)が続くのだが、作者本人をモデルとした辻昌介の思考・行動には、一九四五年八月から五九年執筆(『革命前後』の初出は「中央公論」59・5・12)までの歳月が加わつてきていている。

八月六日朝、ここに原子弹が投下されたとき、福岡の「川島ホテル」で安岡金蔵と二人、マンドリンを弾いていて、爆風を受けた。「ピカドン」の被害については聞くだに身の毛のよだつ思いをしていたが、今、荒漠たる廃墟と化している広島の街を実際に見て、昌介は慄然とした。あの日から二日あまりが経つてゐるが、まだ、死の街の様相をたたえ、白昼なのに鳥肌だつ鬼気をだよわせてゐる。このむぎんさと残忍さとを人間の上に降したもののが、悪魔以外の者のしわざとはどうしても考えられなかつた。「ピカドン」のために死に、傷ついた何十万の人々の姿が眼のあたりに見えないだけ

がせめてものことだつた。八月九日、長崎に投下された原爆については、報道部からすぐに調査隊が派遣された。そして、西仁の報告書の恐ろしさに身ぶるいし、山端祐介が撮影した写真の残酷さを、ほとんど正視出来る者がなかつた。

作中の「報道部」は、福岡市に置かれた陸軍の「西部軍管区報道部」のことだ。『革命前後』の前半部は、敗戦までの報道部を舞台とする。登場人物は本名から少し変えただけで、ほぼ実在と一致する。山端庸介＝山端祐介、東潤＝西仁、鈴木安蔵＝安岡金蔵である。山端庸介の記録写真集『原爆の長崎』（第一出版社、52・8）刊行にあたつて、葦平は跋文「世界に唯一つの記録」を寄せているし、これらの写真の保存・秘匿に関わつたようだ。そのことは、東京から報道部に加わつた、葦平の早稲田在学中からの親友・中山省三郎の自宅にもオリジナル・プリントが保管されている事実からも窺える。中山は一九四七年に早逝し、また葦平も山端も亡くなつたので、詳細な経緯は不明である。長崎原爆については、『革命前後』に少し出てくるから、これ以上は触れない。

ただ、葦平は『原爆の長崎』跋文でも、「八月六日朝」に触れる。

八月六日の朝、奇妙な爆音が聞えて、私たちは待避した。西部軍報道部は福岡市にあつた。私たちの宿舎は渡辺通り三丁目のヤマモト・ホテルであつたが、その唐突な爆音に、部員たちはいつせいに表に飛びだしたけれども、遂に、それが何の爆音であるかは不明に終つた。空襲であれば、警報が出る筈である。（中略）その日、いろいろと爆音の原因を調査したが、なんら知るところがなかつた。広島が、一発の原子弹によつて全滅したことを見つたのは、それから、三日も後である。

この「朝」を、『革命前後』では、安岡金蔵とマンドリンを弾く、いささか戦中にては長閑な風情にし、また滑稽な「待避」にした。「バリバリバリッと、異様な轟音」を挟んで、広島の悲惨とは対照的な情景にする。「頬に空氣の衝撃を感じたのである。

軽い爆風のようだつた」。果たして福岡市内で「轟音」が聞こえたのか、「爆風」を感じたのかは、確認しようがない。葦平の二つの文章のほかには、現在のところ眼にしない。

さて、『革命前後』は葦平の重要な遺作であり、六〇年一月二十四日の自死の一因には、この作品の完結も挙げられる。六〇年元旦の日付で単行本の「あとがき」を書くが、その刊行（二月三〇日付）を見ずて葦平は逝く。そこには、心ならずも「戦争作家」として国民的な作家となつた葦平なりの、戦争に対する「責任」の取り方が見られるという。その検証に進もう。

当初の広島駅の場面では、九州へ向かう列車を待つあいだにも、兵隊をめぐるいろいろな事件が起ころ。そこに昌介も巻きこまれる。「辻昌介さんではありますんか。そうでしよう？」と声をかけてくる兵隊に、親しみを感じて接したが、それは逆転する。

「辻さん、あなた、敗戦の責任を感じるでしような？」

と、つつかかる語調になつて来た。

「は？」

「もちろん、感じとるでしよう。感じずに居られるわけがない。あんたはわしら兵隊の王様で、あんたほどええ目に会つた人はないからね。わしら兵隊は一錢五厘のハガキでなんばでも集められる消耗品じやつたが、あんたは報道班員とやらで、戦地で文章書いて大金儲け、『麦と兵隊』の印税で家を

建てたとか、山林を買ったとか、大層景気のええ話じや。そんなどき、わしら、食うや食わずで泥ンコ生活、わしの弟はレイテ島で戦死してしもうた。あんたが、いつ、『錢と兵隊』を書くかとわしら考えとつたんじや」「おいおい、止めとかんか」と、兵隊の後の列からどなる者があつた。

小柄な復員兵が昌介に食つてかかりはじめてから、復員兵たちはいつの間にか、二人のまわりに垣を作つていた。昌介は、シツカリと唇をとじ、うなだれたまま立つていた。

背後に味方を得たように、なおも、小柄な兵隊は、

「辻さん、敗戦についてのあんたの責任は小さくはないです。わしら、あんたに騙されて戦うたよなもんじや。あんたの書いたものを愛読はしたけんど、今から考えてみりやあ、ええころかげんのことばつかり書いて、人のええわしら兵隊をペテンにかけとつた。あんたが勝つ勝つというもんじやから、わしらほんとうかと思うて、一所懸命にやつて來たんじやが、へん、こんなことになつてしまつて。あんた、この責任をどうするつもりですか。あんた、兵隊の服を着とつたけんど、軍閥の手先じやつたとでしよう。どうですか」

返事が出来なかつた。といつて、弁解する気もなかつた。この兵隊とこんなところで議論したくなかった。

広島駅で、葦平がこうした兵隊の糾弾に遭遇した事実は確認できない。敗戦から一ヶ月も経つてない時期に、ここまで「責任」を追及する声は、一般的な世論としても形成されていない。「新日本文学」や「文学時標」が文学における「戦争責任」（そ

の後の、一般的な呼称としては「文化戦犯」として葦平を名指しで取り上げるのは、一九四六年に入つてから、「西日本新聞」の「声」欄に非難の投書が掲載されるのも、四五年の一二月である。

また、この場面をなぜ「広島駅」にしたのか。そこには、葦平の広島への複雑な思いが込められている。鶴島「年譜」には、一九五一年一〇月に「辰野隆と講演旅行（主催・朝日新聞社、講演先・佐世保、唐津、熊本、鹿児島、延岡、大分、別府、小倉、徳山、広島（一三日、於・広島中央公民館、演題・戦争と文学）、地元の歌人らに戦争責任を糾弾される）」とある。

この講演会後の懇談会については、栗原貞子が「戦犯作家は何に迎えられたか——火野君退席しようや——」（『ときゆめんと・ヒロシマ24年』（社会新報、70・4）所収。初出は「広島生活新聞」51・10・20）で触れている。適宜略しながら概要をまとめると、月十日（二十六年）、追放解除になつた戦犯作家の火野葦平氏が、お伴のサンチヨ、辰野隆氏と共に広島を訪れた。……地元紙の「夕刊中国」の座談会記事では（十月十四日）、最も肝心な部分については「深刻な思想家たちが、火野氏の戦争責任の追求をして火野氏を困らせ、さすがものに動じない辰野大人をムクレさせ、司会者が右往左往する」と言う社会科教室の珍風景を演じた「云々と端折つて後半の無意味な茶話だけをのせていた。……『夕刊中国』に書かれていた部分について書いて見よう。懇談会の会場にあてられた広島ガスピルの会議室には、広島ベンクラブ、広島文学協会の教授連やジャーナリストそして文学中年など四十名ばかり、学生の常連はボイコットしたのか姿が見受けられない。……司会者の簡単な挨拶が終るといきなり文学協会の豊田清史氏（歌

人・中学教師）がたちあがつて、「火野さんに質問いたします」と思つめたよう口火をきつた。「昨日の〈戦争と文学〉」と言う講演による戦争責任の問題と矛盾するが、私も一人の教師として戦争中の教育について反省させられている。火野さんは「自分」の戦争責任について作家としてどのように思つておられるのか」……火野氏の酒に焼けた赤い顔が歪む。「昨日の講演会は大ぜいの人を相手なので話づらかった。私はペンを折ればよかつたがペンを折ることが出来なかつた。もとより私は作家としての責任は回避しない。戦争中書いた作品が厳然として存在しているのであるから——。戦争責任を追求する側から言えば、私が報道員を拒絶すればよかつたのだと言われようが、拒絶することは出来なかつた。軍隊にいれば、命令とあれば書かざるを得なかつた。しかしむかがえつて戦争中の自分の行動については、私は今でも恥じるところはないと思う。これ以上いくら責任を問われても私は何も言うことはない」火野氏が不機嫌に口をつむぐと、会場の空氣はますます渋滞して誰も発言しない。」

その後、栗原貞子が「居直り」と発言する。「作家は作品で自己の誠実を証明しなければならない」と言いながらも、「火野さんの作品を読んでいない」というので、葦平は「うつむいたまま顔をあげないで」、「戦後書いた『青春と泥濘』など読んでから論じてほしい」と応えている。このあたりのやり取りを見ていると、現在の視点からは奇妙なすれ違いを感じざるを得ない。

葦平の「戦争責任」を追及する側は、いかなる「責任」を問おうとしたのか。一介の歩兵伍長（分隊長）に過ぎなかつた葦平に、戦争遂行や開始の責任を問えるはずもない。もちろん、文學者と

して果たした戦意昂揚などの「戦争協力」を言つているのだろうが、ならば、栗原貞子自身が指摘するように、作品に即して批判しなくてはならない。なのに、栗原はたまたま目にした作品いくつかを取り上げ、葦平を非難する（戦犯）という冠称も、「文化戦犯」の規定に由来するが、戦争協力と戦争犯罪は厳密に区別して論じなくてはいけない。これは「戦争」を「原発」に置き換えた場合にもいえる。これでは、対等な文學者同士の論議にならない。少なくとも、代表作には目を通し、その最高の表現を乗り越えていくのが鉄則である。ことに、否定的に批判するならば、その原則は譲れない。

確かに、後に『青春と泥濘』で描くインパール作戦に従軍し、一九四四年九月に帰還した以後、四五年八月までの葦平の文學表現には、大きな変容が見られる。もはや敗戦必至のなかで、悲觀的に進む国内外の戦況に、「歌」をうたうほかない葦平は、判断停止といえる状態に陥つた。その時期を、『革命前後』でようやく自ら描くことができたのだった。そのあいだには、『戦争犯罪人』といつた作品もまとめるし、「鬼は戦争そのものなかにあるのであつて、人間が鬼なのではない」と指摘する「鬼と兵隊——戦犯問題について——」（『文芸春秋』53・12）といつた隨筆も発表した。「鬼」も「魔」も同じ事柄である。ただし、葦平が自覚するのは、広島駅で兵隊が指摘するように「敗戦責任」である。

「戦争責任」と「敗戦責任」、似たようでその違いは大きい。

昌介の内言は「あくまでも庶民として、兵隊と同じ位置に立ち、一切の思考や言動の根拠をつねに兵隊の場においていたつもりだつた」が、「兵隊さえも敵に廻るとすれば、孤立する他はない」ので、「このまま消えてしまいたい思い」になるのだった。